2021.03.11
2021.09.12

正高信男のこと

小嶋祥三

彼は研究を行ったと主張しているようだが、審査委員会が納得できる資料、実験ノートやデータを提出できなかったのではないか。そうであるならば、彼の大麻成分の論文はデータのねつ造によるものと認定されたと考えられる。詳しくは分からないが、この研究だけでなく、ここ何年かの単著論文は同様の性質のものらしい。ここで思い出されるのは M. Hauser で、彼も同じデータのねつ造論文で、Harvard 大学をクビになった。ネットで Hauser の問題の記事を読んだが、この種の研究不正は常習的と考えるのが常識とあった。もし不正が昔から行われているならば、彼の上司だったわたしにも責任がある。

わたしは（多くの霊長研の教員も）、もしかしたら、彼が捏造したデータに基づく論文で、彼を評価、判断していたのかもしれない。昔は研究ノート（一般的には研究の記録か）についてうるさくなかった。実験屋のわたしは嫌でもノートをつけざるを得なかった。観察が主な手法の正高も、記録は必要だったと思うが。いずれにせよ、研究の記録が出せないようではどうしようもない。

彼が昔行なった研究はサルのフィールド研究だった。対象とした群れは絶えず変化する。時には消滅することもある。再検討、再現が難しいのだ。研究ノートなどにうるさくない時代には、データを捏造しようと思えば、いくらでもできた可能性がある。結果を再現できなくても、言い訳がいくらでもできるので。わたしは疑心暗鬼にならざるを得ない。

初期のゲルジ・モンキーの、合成音声を含む、1983 年の Primates 誌の音声プレイバックの論文だが、刺激を作成した（らしい？）S. Yanagida という人物への謝辞があった。しかし、所属が書いてなかった。果たして、そのような人物が実在したか、疑問が湧いてきてしまう。それで Google Scholar で調べてみたところ正高の論文が出た 1980 年頃に大阪大学に Yanagida という先生はいるが、M. Yanagida だった。柳田益造先生。この方は大阪大学の工学部（多分）の出身で、音響工学がご専門。長く同志社大学に勤められ、現在は名誉教授である。正高が名を間違えた可能性はなくはないが、それは考え難い。S. Yanagida 氏とはどのような人物なのだろうか。

彼は注目を集めているテーマに乗ろうとする傾向があったように思う。それはそれでもいいが、そのテーマをきちんと基礎から勉強しなかったように感じた。彼は音声研究をしていたが、音源―フィルター説をちゃんと理解していないような発表があり、驚いた記憶がある。また、音声処理に関しても十分に知識を持っていないようだった。音響学、音声学の基礎知識がキチンとしていない印象だった。これは『研究テーマの栄枯盛衰』で述べたが、注目を集めているテーマは論文になりやすい。データがキレイであれば、なおさらである。正高は業績の多さが強みだったのだが、考えたくないが、もし論文が捏造データで書かれてい

2021.03.11
2021.09.12

たならばと、疑心暗鬼になってしまう。

　ネットで、2017.9.10 の産経ニュースで、正高が東大の渡辺嘉典教授の研究不正を論じていた。渡辺教授は結論に合うようにデータの加工を行い、それを下にも指示していたようだ。正高は、問題の本質はデータの加工を部下に指示した点にあると、ピントの外れたことを言っていた。研究倫理の問題を教室運営の問題にすり替えていた。それは置くとして、研究不正を行った正高が他人の研究不正を論じるとは、何と言っていいのやら、である。正高の不正は、行っていない研究のデータを捏造したことだ（本人は研究を行ったと言っているが、京大は説明が十分でないと結論したのだろう）。渡辺教授以上に悪質だ。一応、正高の疑惑は単著論文の研究に限定されているようだ。彼との共著論文を持つ研究者は、とても迷惑していると思う。正高の渡辺教授の不正に対する指摘は、自分のように一人で不正をすればバレないのに、といっているかのように思えてしまうではないか。

　いずれにせよ、わたしはおのが不明を恥じている。